岐阜市を詠んだ俳句

松　井　貴　子

はじめに

日本全国の地域を詠んだ俳句が集成された『ふるさと大歳時記』シリーズの第三巻『甲信・東海ふるさと大歳時記』には、岐阜県を詠んだ句と同時に、岐阜市を詠んだ句も収録されている。岐阜市は、「岐阜」の章で「岐阜・各務原・羽島周辺」[1]と立項され、地域の特徴が、例句とともに語られている。

岐阜市を詠んだ句[2]から、俳人の眼がとらえた土地の様相を探ってみたい。

Ⅰ　岐阜市という土地

岐阜県の県庁所在地の岐阜市があるのは、濃尾平野の北部に位置する美濃地方である。岐阜市は、同じ濃尾平野に位置する愛知県名古屋市、一宮市の文化圏により近い。例えば、愛知県には八丁味噌の文化圏があるが、岐阜市にも同様にある。方言のアクセントも、名古屋弁よりは抑揚が穏やかに聞こえるが、よく似ている。美濃地方から、飛騨地方に北上すると、味噌の味も、アクセントも違ってくる。同じく岐阜県内にありながら、飛騨地方とは異なる文化圏に属しているのである。岐阜市から名古屋市は通勤圏であるが、飛騨は旅行に行く観光地という距離感覚である。

岐阜県が日本の真ん中にあるとされているように、岐阜市も日本の真ん中という意識が持たれている。郵便番号が500番であることも、この真ん中意識の形成に寄与しているのであろう。

岐阜市は、揖斐川の東に位置しており、どちらかといえば、東の文化圏に属していると思われるが、単純に、東西だけで区分できないことは、言葉のアクセントの感じ方に現れている。当地のアクセントと、東京語、共通語のアクセントが異なっているため、「美濃」「高山」という地名を、地元以外の人によって発音されるとき、違和感を覚えるのである[3]。固有の地名のアクセントに対しては違和感を意識する一方で、その他の日常語については、関東系と関西系の両方のアクセントを耳で聞き覚えるため、一つの語に二つのアクセントが記憶の中に存在するということも生じ得る。

Ⅱ　岐阜市句

岐阜市内で詠まれたことが明らかな句として、『甲信・東海ふるさと大歳時記』に、三十句が収録されている。

「岐阜市」

雨上り夕日が誘ふ初夏の街　　加藤　浩三

この句を、ただ読んだだけでは、岐阜市を詠んだ句である必然性は感じられないかもしれない。岐阜市の中心部には、東西方向に、広く長い道路がいくつも通っている。町名に1丁目から10丁目までついている通りもあり、アーケードが整備されている。このような道路の歩道に立って、夕刻に西の方を向けば、沈みゆく夏の夕日を見つめることができる。人が動くのに心地よい気候の初夏、雨が止んだ夕暮れに人々の足が向くのは、明かりの灯る繁華街であろう。

沙羅双樹釈迦を身近に花仰ぐ　　中島　弘子

この釈迦は、正法寺（黄檗宗金鳳山）の岐阜大仏（岐阜県指定重要文化財）である。真柱に銀杏を使い、木材で骨格を作った上に、竹材を編んで、仏像の形に作られている。表層に粘土を塗った上に、経典が書かれた美濃和紙を張り、漆を塗って、金箔で覆われている。その製作法から、籠大仏と呼ばれている[4]。正法寺は、金華山の麓、岐阜公園に隣接している。長良川にも近い。岐阜公園には、鵜飼桜や日中友好庭園など、桜の見所が複数ある[5]。日本の沙羅双樹は夏椿ともいわれている。

沙羅双樹が正法寺や岐阜公園内にあるかどうか不明だが、長良川をはさんだ北側にある三甲美術館に植えられていて、この美術館は沙羅双樹の館と呼ばれている[6]。岐阜公園を花見散策して作られた句であろう。

山の端の月見や岐阜は十三夜　　支考[7]

岐阜市の山として、まず意識されるのは金華山である。高さ300 m余りの山で、特別な装備がなくても気軽に歩ける複数の登山道が整備されている。麓には観光化された大きな公園があり、近隣は住宅地でもある。伝統的な慣習では、十五夜の月見の後に、十三夜の月見を行い、いずれか片方の月しか見ないのは、片見月として、縁起が悪いとされる秋の季節行事である。十三夜の月光は、満月に少し足りない。そこに、天下取りを目前にして成し得なかった、かつての城主への思いが重ねられているのかもしれない。

「柳ケ瀬」

柳が瀬の夜の一会は鱧なんど　　伊藤　敬子

作者は、名古屋で初めて俳句誌を主宰した女性俳人である。名古屋―岐阜間は、電車で30分弱の通勤圏で、距離感としては遠くない。岐阜在住の門人からの招待で出かけたのであろうか、柳ケ瀬は、市内中心部に位置する一角で、かつては、中部地方有数とも、全国有数ともいわれた繁華街、歓楽街であった。鱧は、関西で多く食される夏のご馳走である。岐阜市は関西圏ではないが、市内には関西風の料理を出す店が多くあって、関東風の料理を出す店もあり、食文化圏を同じくする名古屋風の料理を出す店もあって、混在している。

「初音町」

初音町界隈の暑のうすみどり　　長谷川　双魚

初音町は、金華山の麓の一角にある。山の斜面がすぐ側にあり、町の片側に山の木々が隣接している。静かな住宅街で、旅行者が普通に入ってくる地域ではない。この句の作者は、町内在住者である。日常の生活範囲、慣れ親しんだ地域の季節変化を植物の色彩に託して表現している。山の木々にも土にも、保水機能があり、アスファルトやコンクリートに照り返す夏日を緩和してくれる。

「梅林公園」

紅梅の雨にとけゆく匂ひかな　　奥村　志奈子

岐阜市の梅林公園[8]は、梅林南町の町名がつけられている。約50種、1300本の梅の木が植えられた梅の名所で、毎年、梅の開花時期に、梅まつりが開かれている。公園には無料で入園できる。園内を散策した後、公園に隣接する老舗の料理旅館植東で名物の菜飯田楽を味わう楽しみもある。梅の花は、暗闇でも、その芳香によって、存在を知ることができると古代和歌に詠まれ、季語としての梅の花も、その伝統を引いている。紅梅の花弁は、白梅ほどには、雨に打たれても、傷まないであろう。梅の花の本意である香りが、春の雨とともに存在感を示すのである。

「伊奈波神社」

注連飾巻く大樽の賽銭箱　　小瀬　千恵子

伊奈波神社[9]は、垂仁天皇の第一皇子、五十瓊敷入彦命（いにしきいりひこのみこと）を祭神主神とし、その所在地には、伊奈波通という町名がつけられている。注連飾は新年の季語である。正月は、初詣客が多く訪れる、神社にとって、書き入れ時といえる。それに合わせて、賽銭箱も普段のものではなく、特別に大きな樽を用意して、正月らしく注連飾を巻かれているのである。

「長良町」

ゆふやけや舟で過ぎゆく長良町　　金子　青銅

岐阜市を流れる一級河川長良川の北側の地域に、長良の名を冠した町が複数ある。それぞれの町名は、長良〇〇町、長良△△町、長良××町となっており、この地域の小中高等学校にも、長良の名が付けられている。長良川の流れに乗って、舟で下るならば、左手に金華山と岐阜城が見えるとき、右手にあるのが、長良の町々である。長良川の鵜飼のシーズンには、観覧船が運行される。複数の観覧船が、一艘の鵜舟に並走して観覧する「狩り下り」と、停泊した観覧船から、複数の鵜舟が順番に下っていくのを見る「付け見せ」の二通りの観覧方法がある。日が暮れる前に出船し、上流から鵜舟が来るまでの間、川からの景色を楽しむのである[10]。

「長良川鵜飼」[11]

長良川鵜飼は、宮内庁式部職鵜匠に任命された6人の鵜匠によって行われている。鵜匠は、鵜匠家の男子による世襲で、一家に一人だけが、それを許される。鵜飼のシーズンは、5月11日から10月15日で、悪天候で休漁する以外は、中秋の名月の日だけが休日となっている。それぞれの鵜匠が操る6艘の鵜舟は、毎日、くじ引きで出漁順が決められる。この鵜飼は、「長良川の鵜飼漁の技術」として、平成二十七年（2015年）三月に、国の重要無形民俗文化財に指定されている。

猛り鵜のむんずと水を掴みたる　　岸田　稚魚[12]

長良川鵜飼では、海鵜が使われている。海鵜は、川鵜よりも体が大きい。茨城県で捕獲された野生の海鵜を、岐阜に運び、それぞれの鵜匠家で人に慣れさせ、訓練をする。鵜は扱いやすい鳥であるという。鵜の飼育管理は鵜匠が行い、その日の鵜飼で使う鵜を選ぶ。この日は、鵜飼の観光客を楽しませるべく、特に体力と気力が充実した、しかも、気性の荒い鵜が選ばれたのであろう。そのような鵜が、空腹の状態で魚を捕獲するとき、川の水までも、力強く、嘴で掴んでいるように見えたのである。

鵜をさばく手綱十指のごとくなり　　小室　善弘

長良川の鵜飼では、鵜匠が、一羽ずつの鵜の首に細縄をかけ、その引き具合、締め具合で、鵜を操る。鵜匠自ら麻の繊維を撚り、鵜の「首結い」を作る。鵜の首に当たる部分は緩く撚り、綱を縛る部分はきつく撚るという。鵜の首の付け根に首結いをつけ、それが、ずれないように、腹掛けをつける。鵜が小さな魚を食べることができ、大きな魚は喉元に残るように、絶妙の加減がなされる。鵜匠は、最大12本の手縄を持って鵜を操る。この「手縄さばき」では、鵜の動きを指で感じ取って、繊細に調整する。魚を取った鵜を舟に引き上げて、飲み込んでいない魚を出させたり、縄の絡みをほどいたり、鵜匠は、複数のことを同時にこなしている。

仕舞鵜の一滴を留めしたたれり　　石　寒太

鵜飼は、狩り下りが行われた後、最後に、6艘の鵜舟が揃って魚を追い込む「総がらみ」が行われる。川幅一杯に、6艘の舟が並ぶ。これが、鵜飼のクライマックスで、この後、鵜飼の後片付けが始まる。仕事を終えた鵜は川から舟に上げられる。鵜は潜水して餌の魚を捕るため、深く潜れるように、羽が水をはじかないようになっていて、濡れた羽は広げて乾かす。鵜飼を終えた鵜の羽も、滴るほどに、しっかりと水を含んでいる。狭い鵜舟の中で、十分に羽を広げる余裕はなさそうである。鵜飼の後では、鵜たちが捕った魚のうち、鮎以外のものが鵜の餌になるという。小さな魚しか食べていない空腹を抱えて、鵜匠から餌をもらうのを、じっと待っているのかもしれない。

勇み鵜の火の粉の波を潜りては　　関澤　咲子

鵜飼漁は、日が落ちてから行われ、鵜舟の舳先に篝火が吊るされて、かなり大きな火が焚かれる。鵜を操りながら、篝火が勢いを保つように、随時、松木を足すことも、鵜匠の仕事である。鵜舟の篝火からは、間断なく、大量の火の粉が川面に降り注いでいる。鵜の羽は水を弾かないので、川水を含んでいて、他の鳥より、火に強いのかもしれないが、火の粉が降り注ぐ状況で、何度も川の中に潜って魚を捕り続けることができるのは、鵜匠が、鵜を励ましながら操っていることが、鵜の心を猛々しく保つ大きな力となっているからであろう。

「鵜塚」

鵜の墓に棕櫚はしづかに花こぼす　　岩松　草泊

鵜匠の家で飼われ、鵜飼で活躍した鵜は、年老いて引退してからも、鵜匠家で暮らす。鵜は十数年を鵜匠と過ごし、子孫を残さず、一生を終える。鵜匠にとっての鵜は、家族であり、大切な仕事仲間である。昭和五十八年（1983年）に、長良川の鵜匠、旅館組合、船員組合と岐阜市観光協会によって、鵜を供養する鵜塚が、長良宮口町3丁目に建てられたが、平成十五年（2003年）の道路整備のため、翌年、長良大前町1丁目に移転した。棕櫚は、九州南部に自生していた日本原産のヤシ科植物で、5mを超える常緑高木である。5～6月にクリーム色の小さな花が多数咲く棕櫚の花期は、鵜飼シーズンの始まりに重なる。

「霊天庵鵜供養」

つゆけさの鵜塚といへる石一つ　　草間　時彦[13]

毎年、鵜飼シーズンが終わると、その次の日曜日に、鵜の供養が行われる。鵜匠による供養は百数十年前から行われている。現代の鵜供養は、鵜塚で鵜匠による供養が行われた後、長良川で鵜を俳句に詠んで、短冊に書き、川に流す短冊流しが行われる。鵜塚は霊天庵内にある。作者の没年から考えると、この句が詠まれたのは、移転前の鵜塚で、鵜供養が行われたときであろう。鵜塚には、大きな石が一つ、建てられている。その石は、精巧な細工は加えられていない、自然のままの形が活かされた巨石に見える。鵜飼のシーズンが終わった寂しさ、役目を全うして命を終えた鵜への思いが、秋の露がもたらす湿り、和歌の系譜を引いて、涙を連想させる季語と響き合っている。

鵜供養や雲の流離に水の香す　　近藤　一鴻[14]

鵜供養が行われるのは、立冬から1～2週間過ぎた頃で、暦の上では冬になるが、雲は、まだ、冬雲になりきってはいない。秋には、高層の上空で空気の流れが速くなり、それによって雲が流される。秋の雲として代表的な鱗雲、鰯雲、鯖雲などは、高度5000 m以上にできる巻積雲で、白い小さな粒状の雲の塊が並んでいる[15]。鵜飼が行われる辺りの長良川は下流域で川幅が広く、大きな川音が聞こえるような流れではない。川の存在は聴覚が捉える川水の音ではなく、嗅覚が捉える水の匂いによって感知されている。

昼からは田刈りが待てる鵜の供養　　國島　十雨[16]

現在の鵜供養は、例年、鵜塚前で、午前10時に始まり、長良川での短冊流しを終えるのが、午前11時である。作者が生きた大正から昭和の時代に、どのような日程で行われていたか定かではないが、現代と同じように午前中に終わるように行われていたのであろう。現在よりも朝早くから始められていたなら、供養の後、昼食を取り、田仕事の用意をして、慌てずに収穫作業をすることができる。

鵜供養へ露の枝折戸ひらきけり　　椙山　正彦

枝折戸は、元々は、木や竹の枝を折って作られた簡素な開き戸であった。屋外で内と外の区別をする木戸、庭園内の仕切り、茶庭の露地門などに使われる。晩秋から初冬には、気温が下がり、霜になるまでは、露が下りるのが目に付く。現在の鵜塚のある霊天庵には枝折戸は設けられていないようである。鵜供養では、その年に死亡した鵜の法要が行われる。鵜飼の期間中の七月十六日には、例年、神明神社で、鮎供養が行われている。

「道三塚」[17]

曼珠沙華道三塚を素通りす　　山田　治子

道三塚は、戦国時代の武将斎藤道三のものである。出自は不明で、僧侶であったとも、油売りであったとも言われるが、下克上の時代に、一代で美濃国を支配するまでになった。天文二十三年（1554年）、実子ではなかったとも言われる嫡男斎藤義龍に家督を譲って隠居した後、弘治二年（1556年）、義龍との長良川の戦いで討ち死にした。道三は、崇福寺に埋葬されたが、長良川の氾濫で流されたため、天保八年（1837年）に、長良福光の現在地（崇福寺の北西600 mほど）に移され、昭和三十年（1955年）に岐阜市指定史跡に指定された。その当時、塚の周辺は畑であったが、現在は住宅が密集し、塚のある一角は一般の住宅に隣接している。死人花、幽霊花、地獄花、毒花などの異名を持つ曼殊沙華を季語に使っていることに、作者が道三塚を素通りした思いが込められているのかもしれない。

「立政寺」[18]

柿寺に麦穂いやしや作りどり　　荊口[19]

亀甲山護国院立政寺（りゅうしょうじ）は、浄土宗西山禅林寺派の寺院で、文和三年（1354年）、智通光居が開山し、中世の東海地方で、浄土宗の中心であった。永禄十一年（1568年）、織田信長が、足利幕府第15代将軍足利義昭をこの寺に迎えたことが、天下布武の契機となった。

徳川家康は、関ヶ原の戦いの途上、大垣に向かうときに立ち寄っている。このとき、住職が柿を献上しようとして落したことを、大柿＝大垣が落ちたとして、戦勝の縁起にしたという逸話があり、このときの朱塗りの大盆が現代に伝わっている。大垣藩士であった作者は、この逸話を踏まえて句

を作ったのであろう。「作りどり」は、新田開発をすると、一定期間、年貢を免除されて、収穫物をすべて自分のものにできることである。米だけでなく麦も植えて、寺が収入増を図っていることを、下品でみっともないと詠んでいる。

「乙津寺千手観音像」

千手観音千の御掌のかぎろひぬ　　内田　喜美子

瑞甲山乙津寺（おっしんじ）[20]は、奈良時代に、行基菩薩が十一面千手観音像を草庵に安置したことが始まりとされている。また、平安時代に、弘法大師が開山したことから、通称「鏡島弘法」と呼ばれている。本尊の千手観世音菩薩の他、毘沙門天、韋駄天の木像が、重要文化財に指定されている。千手観音は、一木造、漆箔で、頭上の十一面は様々な喜怒哀楽を表し、合掌する手を除いた両脇の四十手には、一つの手に二十五の救いがあるとされている。一切衆生を救うとされている観音の千手は、木彫りでありながら、炎が細かに揺らめいているように見える。このような造形の特徴をとらえて詠まれた句であろう。

「小紅の渡し」

犬抱いて舟に乗りゆく秋彼岸　　土屋　智子

小紅（おべに）の渡し[21]は、岐阜市に唯一残る長良川の渡し舟である。歴史的には、元禄五年（1692年）に遡る。川下にあった河渡の渡しが中山道の表街道、小紅の渡しが裏街道として栄えたという。長良川には、かつては、複数の渡し舟があり、竹竿や櫂を使っていたが、現在はエンジン駆動で、北岸の一日市場と南岸の鏡島（乙津寺の北）の間を、休航日を除いて、朝から夕方まで運航している。弘法大使の月命日21日は混雑する。航路が県道の一部となっているため、遊覧船ではなく、料金は無料である。犬を抱いて乗船するのは地元の人であろうか。日常生活の中に、渡し舟が存在しているのである。

「正法寺籠大仏」

涼しさは岐阜大仏の鼻の孔　　辻田　克巳[22]

正法寺の岐阜大仏[23]は、坐像の乾漆仏で、胎内に薬師如来が祀られ、周囲には、五百羅漢が置かれている。県の重要文化財で、籠大仏とも呼ばれる。高さ13.7mは日本一の大きさであるという。大銀杏を直柱として、木材で骨格を組み、竹と粘土で形を作った上に、一切経を貼って漆を塗り、金箔を置いている。三十八年の歳月をかけて、天保三年（1832年）に完成した。耳の長さが2.1m、鼻の高さが0.4mである。この大仏は、俯き加減に作られていて、仏を見上げる者に、その眼差しが注がれているように見える。大仏の鼻の孔が、ちょうどよい角度で目に留まり、その快い感じが、涼しいという快い感覚に連なったのであろう。

「手力雄神社火祭」

火祭の神輿火を噴く春の闇　　高間　利見

手力の火祭[24]は、岐阜県重要無形民俗文化財である。手力雄神社の例祭として、四月の第二土曜日に行われる。八つの地域が、それぞれに神輿と御神灯（御幣行燈）、やま（人形）を用意する。滝花火、仕掛け花火、手筒花火、山焼花火が順に点火され、神輿にも火薬を仕込んで、滝花火から火を移し、火の粉が降り注ぐ状態で担がれて、そこに半鐘と爆竹の音が加わる。火の粉を浴びると、一年間無病息災になるという。この火祭りは、歴史的な記録としては江戸時代中期に遡る。大量の花火が使われ、神輿からも火が噴き出す豪壮な祭りは、電気が普及した現代でも、その明かりを凌駕する勢いなのである。

「老洞須恵器窯跡」

「美濃」の銘刻む須恵器や朝の蟬　　大江　夏実

老洞須恵器窯跡[25]は、国の史跡名勝天然記念物、美濃須衛古窯跡群の一部である。「美濃」「美濃國」刻印須恵器が焼かれたのは、藤原京から平城京へ遷都した奈良時代最初期と推定されている。老洞古窯跡群の須恵器が、杯・長頸瓶・平瓶など当時の殆んどの器種を含んでいること、他の美濃須衛窯須恵器よりも高品質であることから、平城京の宮（皇居）への供給品であり、そのために「美濃」の銘が刻まれたという。今はもう使われなくなった静かな窯跡の朝に蝉の声が交響する。夏に鳴く蝉は雌に求愛する雄である。蝉の種類によって鳴く時間が異なり、早朝から鳴き続けるのは、クマゼミやニニイゼミである。

「信長祭」

鵜を放ち鵜かがり放ち信長祭　　萩原　麦草[26]

信長祭[27]は、岐阜城を拠点に天下統一を目指した織田信長の偉業を称えて、毎年十月の第一土曜と日曜日に、市街地を中心に開催される。初日は菩提所崇福寺での追悼式、翌日は信長公騎馬武者行列、火縄銃三段撃ちがある。音楽隊パレード、歩行者天国、楽市楽座などのイベントが両日とも開催される。十月は、まだ長良川鵜飼のシーズン中である。信長祭は日中、鵜飼は夕刻から夜が、メインの時間であり、イベントが行われる場所も少し離れているが、それらが全てが一緒になって、作者の記憶の中で呼び起されているのであろう。

梟雄（ふくろお）の美濃も尾張も水の秋　　日比野　安平

「梟雄」は、「きょうゆう」と読むが、この句では「ふくろお」とルビが付けられている。強い英雄であるが荒々しい人物、残忍な悪党に使われる。中国で、梟の親鳥が、一ヶ月以上、狩りに出かけて、雛鳥の側からいなくなってしまっている状態を、雛が親を食べたから親がいなくなったとされたことに由来するという。中国では、「三国志」の曹操が梟雄と言われている。日本では、斎藤道三、織田信長が梟雄と言われており、いずれも、岐阜に縁のある戦国武将である。信長は尾張出身で、美濃を統治したので、この句で想定されているのは信長であろう。秋は、空と同様に、水も澄む。この秋の水は、かつての戦国の血も、浄化しているように見えたのであろう。

「岐阜提灯」[28]

岐阜提灯は、美濃地方産の竹を使った細い竹ひごと薄くて丈夫な美濃紙で作られる国指定の伝統工芸品である。岐阜提灯の材料である美濃紙も伝統工芸品に指定されており、この美濃紙と竹を使って、和傘や団扇も作られている。岐阜提灯は江戸幕府に献上され、尾張藩や京都の公家にも使われた。一般庶民に普及するのは蝋燭の大量生産が可能になった江戸時代中期以降である。明治時代から全国に知られるようになった。

母が灯し嫂（あによめ）が吊り岐阜提灯　　池上　樵人

岐阜提灯は、御所提灯という上から吊り下げる卵型のものが代表的で、御所丸という丸型のものもあり、盆提灯として使われる。お盆に、先祖の霊が還ってくるとき、迷わないように吊り下げるのが盆提灯である。新盆には白提灯が使われる。彩色画を描かず、白地に墨色で大きく家紋を入れるものもある。母と嫂が、連携した共同作業で、先祖を迎える準備を整えている。祖霊に守られる家である。

逢うて来て岐阜提灯に火を入るる　　井上　純郎

岐阜提灯は、盆提灯として使われてきたが、現代では、インテリアとしても使われている。吊り下げる形だけでなく、床置きできる三本の脚が付いた大内行燈や回転行灯もあり、蝋燭ではなく、電気で灯して安全に使えるようにもなっている。この句で使われている「逢う」は、「会う」とは異なる意味を含んでいる。特に親しい人に、強い思いを持って、一対一で対面するときに使われる。そのような心持ちで家に帰ってきて、電気ではなく、火で、提灯に点灯している。

岐阜提灯祖母の背中の灸のあと　　藤吉　琴江

歴史的に提灯が記録されているのは平安時代末期に遡るが、江戸時代までは高級品であり、天皇や貴族、有力な武家が使用するものであった。和紙だけでなく、絹を貼った提灯も作られた。庶民の日常に提灯が定着するのは、江戸時代後半から明治時代以降である。灸をすえた痕のある背中を見せているのは、庶民の生活の一場面であろう。

人々のやさしくみゆる岐阜提灯　　水野　久代

岐阜提灯に貼られる美濃紙には、秋の花、鳥、風景が繊細に描かれる。もともとは白い提灯であったものが、1800年頃から彩色画の提灯になったという。ごく薄く漉かれた美濃紙に描かれた図柄が、提灯の内側に灯された明かりによって、極細の竹の骨組みを通して、浮かび上がる。提灯から柔らかな光が広がる空間で、そこに居る人々も、穏やかに柔和な佇まいに見えたのである。

Ⅲ　金華山

岐阜市にある金華山を詠んだ十句[29]については、独立して収録されている。金華山は、単独に

存在する山ではなくて、同じような山が隣接して連なっているが、岐阜城がある山として、特別な存在感を持っている。

「岐阜城」[30]

岐阜城は、金華山の山頂にある。ここには、鎌倉時代に砦が築かれたという。戦国時代には斎藤道三の居城で、難攻不落と言われていたが、信長が攻め、自らの居城とした。このとき、それまでの地名を井ノ口から岐阜に、城の名を稲葉山城から岐阜城に変えたと伝えられている。

道三の信長の夢鳥雲に　　清水　浩

城主が道三から信長に移った後、信長は、この城で、天下布武を掲げて、天下統一の本拠地とし、楽市楽座によって城下町の振興を図った。関ヶ原の戦いでは、信長の孫秀信が西軍に味方したため、東軍に攻められて落城した。天守や櫓、御殿などは、近隣の加納城他に移築されたが、後に落雷で焼失したという。「鳥雲に」は、春になって、渡り鳥が北方に帰るとき、雲の中に入って見えなくなることである。歴代の城主が志を遂げることなく、廃城になった城に響く季語である。

城あとや古井の清水先づ問はむ　　芭蕉[31]

「岐阜山にて」の前書がある。この山は、稲葉山と呼ばれていた、現在の金華山である。岐阜公園に句碑がある。岐阜城は、関ヶ原の戦いの後、廃城となった。芭蕉が訪れたのは、「笈の小文」の旅の帰路、岐阜の庄屋松橋喜三郎に招かれた、貞享五年（1688年）の夏であった。金華山の地盤は固い岩盤のため、山頂部では井戸で水を確保するのが難しく、雨水を溜めていたという。芭蕉は、このことを知っていて、最初に、古井戸を訪れたのかもしれない。井戸に水が湛えられていることを期待したのであろう。

椎の花城に古りゆく武具と馬具　　藤田　東陽

廃城になったあとの岐阜城は、明治時代に木造、亜鉛葺きの模擬天守が再建されたが、太平洋戦争中の失火により失われ、現在の城は、昭和31年（1956年）に、鉄筋コンクリート造りで再建されたものである。3層4階の構造で、城内は史料展示室となっている。椎の花は、6月頃、雌雄の穂状花をつけ、強烈な匂いを発散するという。展示された武具や馬具が、使われることなく時を経ている様子と、毎年、繰り返される旺盛な植物の生命活動が対比されている。

岐阜城の銃眼に冬紅葉かな　　甲斐　納子

銃眼は、射撃に使用するために開けられた穴で、狭間とも言う。岐阜城は廃城された後、戦乱に使われることはなくなり、再建された現在の城は、城内に史料展示室、楼上に展望台のある観光施設となった。金華山一帯は平成23年（2011年）に「岐阜城跡」[32]として国史跡に指定されている。かつて、弓矢や銃を通していた穴には、現代では、冬紅葉の枝や蔓が伸びて、入り込んでいる。平和な光景である。

「天守閣」[33]

天守閣より目に青葉目に若葉　　岬　雪夫

岐阜城は、標高329mの金華山山頂にある。城の最上階に展望台があり、長良川を見下ろすことができる。遠望すれば、東の方に恵那山、木曽御岳山、北の方に乗鞍岳、西の方に伊吹山、養老山地、鈴鹿山脈、南の方に濃尾平野があり、木曽川が伊勢湾まで流れるのも見える。城は、日没から夜11時まで、ライトアップされる。金華山に自生する様々な木々の葉が、若葉から青葉まで、それぞれに生長している様子に目を留めて詠まれている。山口素堂の「目には青葉山ほととぎす初鰹」の句を思い起こさせる句である。

「金華山」

金華山鳶あをぞらに椎の花　　石原　舟月[34]

夏の青空のもと、金華山に生息する鳥と、季節の花を詠んでいる。金華山にはブナ科の円椎（つぶらじい）が多く見られ、5月上旬に黄色い花を咲かせると全山が黄色に見えたことから金華山の名がついたと言われている。円椎は岐阜市の木になっている。旅行者として金華山を訪れたときの挨拶句であろう。

青田刈る彼方に暁けの金華山　　河村　素人

青田刈りは、稲穂が実る前に、穂が青いうちに刈り取ることである。戦国時代には、敵の食糧と

されないようにするための戦術であった。現代では、減反政策として行われる。途中まで育てた稲を刈ることは、生産農家としては、納得できない気持ちを持つであろう。早朝の農作業の手を休め、朝日を受けた金華山を遠くから眺めて、戦国時代に思いを馳せているのかもしれない。

鵜飼果て立ちはだかれる金華山　　鷲見　明子

長良川の鵜飼が終了するのは夜である。鵜篝がなくなると、それまでの明るさとの落差が大きく、真っ暗になったように感じられる。川辺は金華山の麓である。明かりが灯されない金華山は真っ暗で、川岸で灯される電灯の明るさを凌駕する暗闇なのであろう。明暗の変化が、真っ黒な金華山の存在感をより大きく感じさせている。

野分過ぎ城をせりあぐ金華山　　宇咲　冬男[35]

野分は、野を分けて風が吹くという意味で、台風のことである。野分過ぎは、台風が去った後のことで、野分あと、とも言う。台風がもたらした暴風を受けて、金華山の木々の様子が変化し、相対的に、山頂の岐阜城の見え方も変化したのである。場を共有した吟行句であれば、より具体的に理解されるであろう。

「禅林寺」

考える奥へ奥へと蟬しぐれ　　武田　光弘

禅林寺[36]は、臨済宗妙心寺派で十一面観音菩薩を本尊としている。美濃新四国八十八ヶ所霊場の第七番札所でもある。岐阜公園の南端に位置し、岐阜市歴史博物館の前、金華山の百曲り登山道の上り口近くが入口で、山門まで長い階段を上る。中に神社と本堂がある。境内には紫陽花が1500株あり、あじさい寺と呼ばれている。蝉が鳴き続ける山の木々の間を進むうちに、寺の名の如く、禅的な思考になったのであろう。

おわりに

岐阜市で俳句に詠まれたのは、長良川、金華山、岐阜公園の一帯を中心とするエリアである。歴史上の人物ゆかりの地であり、鵜飼が行われる観光地でもある。市内には、それぞれに歴史のある神社や寺が点在している。歴史的な事項や地名、土地の特産品を詠んだ句が地域の特性を表出している。観光資源のある土地では、地元の人々の日常生活は句材としての注目度が低くなるのであろう。俳人が目を留めるのは、非日常感のある事柄である。観光によって得られる楽しみの一つが句材となる非日常感なのである。

---

1 『ふるさと大歳時記３　甲信･東海ふるさと大歳時記』「岐阜・各務原・羽島周辺」458 － 459 頁

2 「岐阜」句　458 頁

3 姫路と足利の出身の人が、「姫路」と「足利」のアクセントが、地元と東京とで違っていることに、ひどく違和感を覚えていたことから、初対面の自己紹介をする場で、地元の発音をくりかえし強調して、自分の出身地の名称は、地元のアクセントで地名を言ってほしいと依頼していたことがあった。アクセントが違うと、自分が慣れ親しんだ地名に聞こえない、他の土地のように感じてしまうというのが、その理由であった。

4 正法寺 HP　https://www.gifu-daibutsu.com/wp/　2021・5・30 日

5 岐阜公園 HP　https://www.city.gifu.lg.jp/8416.htm　2021・5・30 日

6 三甲美術館 HP　https://sanko-museum.or.jp/about/　2021・5・30 日

7 「支考」『俳文学大辞典』358 － 359 頁
　寛文五年（1665 年）、美濃国山県郡に生まれ、享保十六年（1731 年）に没した。各務氏。元禄三年（1690 年）に近江国で芭蕉に入門した。蕉門随一の理論家と評され、芭蕉晩年の作風を受け継いで、美濃派俳諧を確立した。

8 岐阜市漫遊 HP　「梅林公園」https://www.gifucvb.or.jp/sightseeing/detail_kankou.php?eid=00020　2021・8・3 日

9 伊奈波神社 HP　http://www.inabasan.com/　2021・8・3 日

10 岐阜市漫遊 HP「ぎふ長良川の鵜飼」https://www.gifucvb.or.jp/sp/ukai/　2021・8・27 日

11 ぎふ長良川鵜飼 HP　https://www.ukai-gifucity.jp/Ukai/　2021・8・27 日

12 「岸田稚魚」『俳文学大辞典』202 頁
　大正七年（1918 年）、東京に生まれ、昭和六十三年（1988 年）に没した。石田波郷主宰「鶴」と、一時期は、加藤楸邨主宰「寒雷」で活動し、第三回角川俳句賞、第十二回俳人協会賞を受賞した後、「琅玕」を創刊主宰した。

13 「草間時彦」『俳文学大辞典』242 － 243 頁
　大正九年（1920 年）、東京に生まれ、平成十五年（2003 年）に没した。水原秋桜子、石田波郷に師事した後は、無所属となって、主宰誌を持たず、俳句文学館建設に尽力した。味覚を活かした独特の俳句世界を形成している。

14 「近藤一鴻」『俳文学大辞典』309 頁
　明治四十五年（1912 年）、横浜市に生まれ、平成八年（1996 年）に没した。大野林火に師事し、林火主宰の「濱」創刊に参画した後、「貝寄風（かいよせ）」を主宰した。

15 「秋の天気知識・豆知識」　お天気 .com HP　https://hp.otenki.com/knowledge/autumn/　2021・9・3 日

[16]「國島十雨（じゅうう）」『俳文学大辞典』247 頁
　大正四年（1915 年）、岐阜県に生まれた。没年不詳。石田波郷に師事した。美濃派獅子門第三十九世道統宗匠となり、「獅子吼（ししく）」を主宰した。

[17]「道三塚」 岐阜市文化遺産デジタルアーカイブ HP http://digitalarchiveproject.jp/database/%E9%81%93%E4%B8%89%E5%A1%9A/　2021・9・6 日
「道三塚」日本伝承大艦 HP　https://japanmystery.com/gifu/dosanduka.html　2021・9・6 日
「岐阜市：道三塚」岐阜県：歴史・観光・見所 HP https://www.gifureki.com/gifu/dousan.html　2021・9・6 日

[18]「信長が足利義昭を迎えたお寺「立政寺」」武将愛 HP https://busho-heart.jp/archives/5810　2021・9・6 日
「「大柿」落とした大盆（岐阜市・立政寺）」（2018 年 5 月 29 日記事／山下周平）　朝日新聞デジタル HP　http://www.asahi.com/area/aichi/articles/MTW20180529241340001.html　2021・9・6 日

[19]「荊口（けいこう）」『俳文学大辞典』236 頁
　正徳二年（1712 年）に没した。宮崎氏。美濃国大垣藩士で、芭蕉に入門した。

[20] 乙津寺 HP　https://osshinji.com/　2021・9・6 日

[21]「小紅の渡し」岐阜市漫遊 HP　https://www.gifucvb.or.jp/sightseeing/detail_kankou.php?eid=00026　2021・9・8 日

[22]「辻田克巳」『俳文学大辞典』582 頁
　昭和六年（1931 年）、京都市に生まれた。山口誓子主宰「天狼」、秋元不死男「氷海」に投句し、同人となる。第四回俳人協会新人賞を受賞した後、「幡（はん）」を創刊主宰した。

[23]「岐阜大仏（正法寺）」 岐阜市漫遊 HP　https://www.gifucvb.or.jp/sightseeing/detail_kankou.php?eid=00007　2021・9・8 日
黄檗宗金鳳山正法寺　大仏殿 HP　https://www.gifu-daibutsu.com/wp/　2021・9・8 日

[24]「手力の火祭」岐阜市 HP　https://www.city.gifu.lg.jp/12924.htm　2021・9・9 日
「手力の火祭」岐阜市漫遊 HP　https://www.gifucvb.or.jp/event/detail_spring.php?eid=00004&calendar_keisai=1#modosu　2021・9・9 日

[25]「なぶんけんブログ「美濃」「美濃國」刻印須恵器はどこへいったのか？」奈良文化財研究所 HP　https://www.nabunken.go.jp/nabunkenblog/2018/01/20180115.html　2021・9・10 日
「老洞・朝倉須恵器窯跡」文化遺産オンライン（文化庁）HP　https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/190842　2021・9・10 日

[26]「萩原麦草」『俳文学大辞典』732 頁
　明治二十七年（1894 年）、静岡県に生まれ、昭和四十年（1965 年）に没した。渡辺水巴に師事し、「壁」を創刊主宰した。

[27]「ぎふ信長まつり」ぎふの旅ガイド（岐阜県観光連盟）HP　https://www.kankou-gifu.jp/event/975/　2021・9・14 日
「ぎふ信長まつり」岐阜市漫遊 HP　https://www.gifucvb.or.jp/event/detail_autumn.php?eid=00026&calendar_keisai=1　2021・9・14 日

[28] 岐阜提灯協同組合 HP　https://www.gifu-chochin.or.jp/　2021・9・23 日
「岐阜提灯」工芸ジャパン HP　https://kogeijapan.com/locale/ja_JP/gifuchochin/　2021・9・23 日

[29]「金華山」句　458 － 459 頁

[30]「岐阜城」岐阜市漫遊 HP　https://www.gifucvb.or.jp/sp/kanko/gifujo/　2021・9・23 日

[31]「芭蕉」『俳文学大辞典』741 － 742 頁
　正保元年（1644 年）、伊賀国上野に生まれ、元禄七年（1694 年）に没した。伊勢国藤堂藩に仕え、嫡子良忠（俳号蟬吟（せんぎん））と俳諧に励んだ。蟬吟と死別した後、俳諧師となるべく、江戸に下り、風狂の旅を通して、蕉風俳諧を確立した。

[32]「国史跡　岐阜城跡」岐阜市 HP　https://www.city.gifu.lg.jp/3537.htm　2021・9・24 日

[33]「岐阜城天守閣」岐阜市 HP　https://www.city.gifu.lg.jp/3537.htm　2021・9・23 日

[34]「石原舟月」『俳文学大辞典』42 頁
　明治二十五年（1892 年）、山梨県に生まれ、昭和五十九年（1984 年）に没した。飯田蛇笏主宰「雲母」に入会し、龍太が継承した後も活動を続けた。石原八束の父である。

[35]「宇咲冬男」『俳文学大辞典』78 頁
　昭和六年（1931 年）、熊谷市に生まれ、平成二十五年（2013 年）に没した。宇田零雨に師事し、「梨の芯の会」（のち「あした」）を創刊主宰した。

[36]「禅林寺」 八百万の神 HP　https://yaokami.jp/1215007/　2021・9・23 日

参考文献

角川文化振興財団編（編集委員代表中村苑子）『ふるさと大歳時記 3　甲信・東海ふるさと大歳時記』1993・11　角川書店　456 － 459、476 － 477 頁
「岐阜」
「美濃」句　456 頁
「飛騨」句　456 頁
「岐阜の自然と風土」456 － 457 頁
「岐阜・各務原・羽島周辺」458 － 459 頁
「岐阜」句　458 頁
「金華山」句　458 － 459 頁
「各務原」句　459 頁
「羽島」句　459 頁
「木曽川」句　459 頁
「長良川」句　459 頁
「揖斐川」句　459 頁

岐阜ユネスコ協会編『岐阜文学どらいぶ』1966・5　岐阜ユネスコ協会

井本農一他監修、尾形仂他編『俳文学大辞典』1995・7　角川書店

平井照敏編『新歳時記（春）』1989・3 初版、1996・12 改訂版　河出書房新社

平井照敏編『新歳時記（夏）』1989・6 初版、
1996・12 改訂版　河出書房新社
平井照敏編『新歳時記（秋）』1989・8 初版、
1996・12 改訂版　河出書房新社
平井照敏編『新歳時記（冬）』1989・10 初版、
1996・12 改訂版　河出書房新社
平井照敏編『新歳時記（新年）』1990・1 初版、
1996・12 改訂版　河出書房新社
角川書店編『図説　俳句大歳時記　春』昭和
1973・4 初版、1977・10　7 版　角川書店
角川書店編『図説　俳句大歳時記　夏』昭和
1973・7 初版、1977・10　7 版　角川書店
角川書店編『図説　俳句大歳時記　秋』昭和
1973・9 初版、1978・2　6 版　角川書店
角川書店編『図説　俳句大歳時記　冬』昭和
1973・10 初版、1977・10　6 版　角川書店
角川書店編『図説　俳句大歳時記　新年』昭和
1973・11 初版、1978・2　5 版　角川書店

Gifu City in Haiku

MATSUI Takako

Abstract

Gifu City is the capital of Gifu Prefecture, with a population of about 400,000 and an area of about 200 square kilometers. Gifu City's postal code is 500, which is the median postal code in Japan, so people in Gifu City believe that Gifu City is the center of Japan.

Haiku poets write their haiku around famous places and historic sites in Gifu City, such as the Nagara River, Mount Kinkazan and Gifu Park.

The Nagara River is a large river between the Kiso River in the east and the Ibi River in the west (the cultural border between the east and west of Japan). The Nagara River is home to the annual cormorant fishing season from May 11 to October 15, when six cormorant boats burn cormorants on their bows, creating a stunning contrast of light and dark.

At the top of Mt. Kinkazan, there was an impregnable castle. When warlord Dōsan Saitō ruled Mino, it was Inabayama Castle in Inokuchi. Then, Nobunaga Oda, a native of Owari, ruled Mino and renamed it Gifu Castle in Gifu intending to unify the country. However, it was abandoned after the Battle of Sekigahara, rebuilt in the Meiji era, destroyed by an accidental fire during the Pacific War, and rebuilt in 1956 with reinforced concrete to serve as an exhibition and archive.

The Gifu Daibutsu (Great Buddha) of Shōbouji Temple is a 13.7-meter-high seated statue of dry lacquer and is called Kago Daibutsu. The delicately lit Gifu Chōchin is a Bon lantern made of local bamboo to welcome the spirits of ancestors.

（2022 年 4 月 4 日受理）